

看護学生の自尊感情 (Self-Esteem) と 学習環境に関する研究—その 3—

A Study of Self-Esteem and Learning Environment on Nursing Students

天使女子短期大学 和田 サヨ子
Sayoko WADA

文部省統計数理研究所 高木 廣文
Hirofumi TAKAGI

ニューヨーク大学 筒井 真優美
(看護学部博士課程) Mayumi TSUTSUI

聖母女子短期大学 沢 礼子
Reiko SAWA

Rogers, C. R. clarified that when our emotions and experience do not agree with our self-concept we tend to reject our environment. It is believed that the student's self-concept also plays an important role in accepting the learning environment in nursing.

The first purpose of this study was to examine the factors of self-esteem and the acceptance of the learning environment of nursing students for three years in college. The second one was to investigate the characteristics of each class. We found six common factors concerning the self-esteem of nursing students and their acceptance of the learning environment.

1. a positive response to the Biblical approach
2. to care about what others people think of me
3. adaptability to study
4. the difficulty of personal relationships
5. the psychological conflict caused by the Bible
6. the relationships with their teachers

A significant difference was found in second factor in the nursing students. These students tended to accept in a more positive way concerning the third and sixth factors.

1. はじめに

青年期の発達課題を持つ看護学生にとって学習目標を達成する上で環境的要素は、学生の成長を左右する重要な因子と考えられる。

Rogers, C. R.¹⁾は、環境の受容には自己概念が重要な役割を持つと述べている。自己概念の重要な部分を占める自尊感情 (Self-Esteem) が、肯定的な場合、環境を受容し環境に積極的に適応していくと考えられる。

看護学生を対象とする研究には、学習意

欲^{2),3)}、学生生活への適応^{4),5)}、臨床実習の受容⁶⁾、看護職の認識⁷⁾などに関するものがあるが、学生自身の内面と学習環境に焦点をあてた研究は少ない。^{6),8)~10)}

本研究では、看護学生が学習環境を受容するための効果的アプローチに役立てるために看護学生の自尊感情¹¹⁾と学習環境(教師や友人との人間関係、看護への適応、日常生活における聖書的アプローチ^{12),13)}に対する反応)の受容に関する因子および、それらの因子の人学年度から卒業年度までの3年間の時期別の変化の推移を検討することを目的とする。

2. 概念枠組み

本研究の概念枠組は、Rogers, C, Rの自己概念理論を基盤として、主要な自己概念すなわち、現象の場のなかで知覚された対象としての自己の構成要素である自尊感情(SE)と絶えず環境との相互作用を持つシステムとして、機能する個人を考えモデルを作成した(図1)。すなわち個人は、環境との相互作用を通じて、変化している経験の世界(World of experience)に存在している¹⁴⁾。有機体は、1つの体制化された全体(an Organized whole)としてこの現象の場に反応する¹⁵⁾。

すなわち、人間行動の理解にとって重要なのは、その人の生活を取りまく環境でもなければ、事件でもない。

最も重要なのは、これらの環境や事件をその人がいかに認識するかということであり、自己概念がさまざまな意味における基本的な基準としての機能をはたしている。

Rogers, C, Rによれば、感情や体験が自己概念に矛盾すると、そこに環境に対する否認

が生まれる。あらゆる不適応は、誤った体験の結果である。この誤った体験は、健全な自己実現的パーソナリティの発達を妨害するものである。Rogers, C, Rの自己概念理論によれば不適応行動とは、情動のおよび生理的反応にもとづく自分自身の評価と他者の評価との間の葛藤の結果である。このような葛藤を生じる状況下に置かれれば、いつも不安をおぼえ、その人は、そういう場面で傷つきやすくこれを無意識的に脅威とを感じる。このような否定的体験によってもたらされた情緒、たとえば不安、敵意、罪責感などは、SEを低下させ、不適応問題を生じ学生の学習活動を困難にする。

この点から看護学生に関しても学習環境の受容には、自己概念の主要な部分を占めているSEが、重要な意味を持つものと考えられる。すなわち、自分を価値あるものとしてとらえ、他人から尊敬されていると感じる人は、環境を受容し、環境に積極的に適応していくものと考えられている。

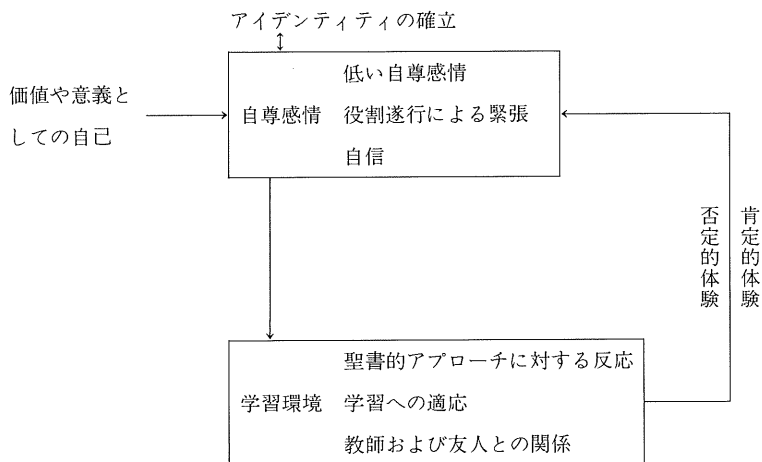


図1 自尊感情と学習環境の受容に関する要因

われわれは、これまで看護学生のSEと学習環境に関する一連の研究によって、看護学生の聖書的アプローチと学生の看護への適応、アイデンティティへの内省化の傾向を確認した^{16)~18)}。またわれわれが、これまで行った調査において、自尊感情尺度得点が高い場

合、学習環境を肯定的に受けとめる傾向があり、逆に自尊感情尺度得点が低ければ、学習環境を否定的に受けとめる傾向が示唆された¹⁹⁾。

看護学生が体験する学生生活は、学年が進むにつれて学生自身のもつ限界を気づかせられるような体験の積み重ねとなっている。すなわち、看護実践においては、対象となる患者との対人関係、教師との対人関係などの実習経験を通しての自己の無力感、あるいは、適性への懷疑、人間関係のむつかしさがしだいに看護学生自身の SE を根底からゆるがすことになる。

以上の視点から本研究は看護学生の SE に影響を及ぼす学習環境における因子を探索し、看護学生の適応を促がす一助としたい。

3. 対象と方法

全寮制による 3 年制看護短大生（以下被験者 1984 年度 4 月入学～1986 年度 3 月卒業 38 名）および被験者が在学中の全在校生を調査対象とした表 1-1、1-2。

表 1-1 被験者(37期生)の追跡
調査時期 学年別、対象者数

時 期 学 年	7 月	3 月
1 年 (人) (84年度)	40	40
2 年 (人) (85年度)	38	36
3 年 (人) (86年度)	38	38

表 1-2 被験者在学中の入学年度別調査時期別の全対象者数

	82年度入学 (35期生)			83年度入学(36期生)			84年度入学(37期生)			85年度入学(38期生)		86年度入学 (39期生)
	3 年 次	2 年 次	3 年 次	1 年 次	2 年 次	3 年 次	1 年 次	2 年 次	1 年 次	2 年 次	1 年 次	
7 月の人数 (人)	36	38	35	40	38	38	42	41	45			
3 月の人数 (人)	37	37	37	40	36	38	43	40	41			

被験者の 1 年次から 3 年次の 7 月 3 月、計 6 回にわたり、被験者とその時の在校生に対して質問紙調査を行った(表 2)。なお回収率は、100%であった。

質問紙は、46 項目からなり自尊感情の測定は、信頼性の検討がなされている遠藤ら(1974)の自尊感情項目²⁰⁾(Q 1～Q 23)を使用した。また学習環境としては、波多野²¹⁾、伊藤²²⁾、坂口²³⁾らが、調査項目としてとりあげている、教師や友人との対人関係・看護への適応等に関する項目(Q 24～33)を設定し、さらに日常生活における本学の教育理念の理解に関する項目(Q 34～46)を設定した(表 2)。

この質問紙の信頼性係数は、0.925 であった。各項目の 1 回答の選択肢は、「はい」、「ときどき」、「いいえ」の 3 段階とし、因子分析には、それぞれ 3、2、1 の各得点を与えた。

分析は、調査時期における各項目のクロス集計を行った。次に因子分析(バリマックス法)を行い、さらに抽出した各因子の因子得点を求め、被験者および入学年度別各学年間、調査時期での差を調べるために分散分析を行った^{24),25)}。尚、全寮制における宗教的アプローチには、週日の朝夕の祈り(全員参加)がある。その他学生全員参加の宗教行事は、年に 2 回の 2 泊 3 日の静修会、月に 1 回の御ミサと聖書による講話、クリスマス等である。

4. 結 果

1) 調査時期別による各項目間のクロス集計

被験者に関しては、各項目の調査時期別にクロス集計を行い、有意差のみられた項目を表 3-1 に示した。

表2 看護学生への質問紙

該当するところに○印をつけて下さい。

1. 1年 2. 2年 3. 3年

以下の質問の該当する答に○印をつけて下さい。

1. あなたが知っている大部分の人びとに比べて自分の方が劣っていると感じるようなことはありますか。
2. あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか。
3. あなたは、自分の知的である人びとが、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくると確信していますか。
4. あなたは自分の過誤（ミス）はいつも自分のせいだと感じることがありますか。
5. あなたは自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。
6. あなたは自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか。
7. 一般に、あなたは自分のいろいろの能力について自信をもっていますか。
8. あなたは、自分にうまくやれることなど全然ないといった気持になることがありますか。
9. あなたは、自分が他の人びととのくらいうまくやっていると気になりますか。
10. あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評を気にしますか。
11. あなたは、他の人びとがすでに集って話し合っている部屋に自分一人ではいていくような場合、気兼ねや不安を覚えますか。
12. あなたは人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか。
13. あなたは、クラスや自分の同年輩の人びとのグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり不安に思ったりしますか。
14. 他の人びとがみているところで、ゲームやスポーツをやっており、それに是非勝とうと思っている場合、あなたはとり乱したりまごついたりしますか。
15. 他の人びとから、あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか、あるいは失敗者（劣等生）とみられているかということについて、あなたは気になりますか。
16. 人といっしょにいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいかに困りますか。
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしでかしたとき、あなたは長くそのことを気にしますか。
18. あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのがむずかしいですか。
19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか。
20. あなたは恥ずかしくてどうもならないと思うことがありますか。
21. 自分の意見に同意しない人びとを説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか。
22. あなたの友達や知りあいのなかに、あなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるときあなたはそのことを気にしますか。
23. 他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたは気になりますか。
24. 看護という職業はあなたを生かすものだと思いますか。
25. 病院実習は好きですか。
26. 自己学習活動や実習に間関する日報その他の課題はあなたにとって適当な量だと思いますか。
27. 先生とのコミュニケーションに満足していますか。
28. 先生とのコミュニケーションを持っていますか。
29. 学校での友人関係に満足していますか。
30. 学校での相談できる友人はおよそ何人いますか。
31. 学校での相談できる先生がいますか。
32. 看護職に進むことに誇りを感じますか。
33. 大学での専門の勉強は楽しいですか。
34. E書のみことばは両親、自分の存在について感謝の念を増させるものですか。
35. 聖書のみことばは看護職に対する「ほこり」を増させるものですか。
36. 聖書のみことばは看護職について専門職である以上に「天職への召命」ということをうらづけますか。
37. 聖書のみことばは医療の複雑な判断を要求される臨床場面で具体的な判断基準の指針となりますか。
38. 朝の祈りは、あなたの1日の始まりに“力”を与えていますか。
39. 夕の祈りは、あなたの1日の終りに“感謝”を与えていますか。
40. 朝礼に参加することにより、自分に対する感情は肯定的になっていくように思いますか。
41. 聖書は、あなたがケアをする上で指針になりますか。
42. 日常生活の人間関係における問題解決は、聖書が基盤になっていますか。
43. 聖書のみことばによって不安になることがありますか。
44. 聖書に親しむことによって、悩みや葛藤に対する気持は強くなるように思いますか。
45. 聖書によって、友人、教師との人間関係は、日常生活で気になる問題として意識されますか。
46. 聖書に観る人間像と自己像との不一致による葛藤で悩みますか。

表3-1 自尊感情に関する項目の3年間の推移(1)

項 目		自 尊 感 情												
		Q 4			Q 6			Q 9			Q 12			
		ミスは 自分のせい 気になる			自己嫌悪			他の人と うまくやって いけるか			人の前で はにかむ			
		はい	時々	いいえ	はい	時々	いいえ	はい	時々	いいえ	はい	時々	いいえ	
人数 (%)	1 年次	7 月	57.5	35.0	7.5	71.8	25.6	2.6	67.5	30.0	2.5	57.5	27.5	15.0
	(84年度)	3 月	60.0	40.0	0	77.5	22.5	0	62.5	32.5	5.0	53.8	46.2	0
P<0.05* P<0.01**	2 年次	7 月	44.7	55.3	0	71.1	26.3	2.6	57.9	31.6	10.5	50.0	47.4	2.6
	(85年度)	3 月	38.9	61.1	0	72.2	27.8	0	52.8	44.4	2.8	52.8	47.2	0
	3 年次	7 月	34.2	65.8	0	63.2	36.8	0	50.0	39.5	10.5	44.7	50.0	5.3
	(86年度)	3 月	34.2	63.2	2.6	28.9	68.4	2.6	31.6	65.8	2.6	27.0	70.3	2.7
6 グループの χ^2			22.187*			29.931**			19.359*			26.281**		

表3-2 学習環境に関する項目の3年間の推移(2)

項 目		学習への適応			教師との人間関係						友人との関係			
		Q26			Q28			Q31			Q29			
		自己学習量 は適量			先生との コミュニケー ションがある			学校で相談 できる先生 がいる			学校での 友人関係 に満足			
		はい	時々	いいえ	はい	時々	いいえ	はい	時々	いいえ	はい	時々	いいえ	
人数 (%)	1年次	7月	10.3	46.2	43.6	5.0	50.0	45.0	27.5	47.5	25.0	35.9	51.3	12.8
	(84年度)	3月	7.5	37.5	55.0	25.0	60.0	15.0	20.0	47.5	32.5	37.5	47.5	15.0
P<0.05* P<0.01**	2年次	7月	13.2	28.9	57.9	16.2	59.5	24.3	42.1	47.4	10.5	57.9	34.2	7.9
	(85年度)	3月	8.3	44.4	47.2	17.1	68.6	14.3	33.3	50.0	16.7	69.4	25.0	5.6
	3年次	7月	10.5	52.6	36.8	21.1	68.4	10.5	55.3	36.8	7.9	73.7	23.7	2.6
	(86年度)	3月	15.8	76.3	7.9	23.7	65.8	10.5	48.6	40.5	10.8	78.9	15.8	5.3
6グループの χ^2		27.270**			24.563**			20.677*			28.280**			

a) 自尊感情

「Q 4、ミスは、自分のせい」、「Q 6 自己嫌悪」、「Q 9、他の人とうまくやっていけるか気になる」、「Q 12、人の前ではにかむ」の4項目は、1年次で「はい」とする回答率が高く、2年3年になるほど低くなっている。特に3年の後半に著しく減少している。

b) 学習への適応

「Q 26、自己学習量」に関しては、1年の後半から2年の前半にかけて適量でないとするもの約55%~60%を占めるが、3年の3月になるとその割合は、約8%に減少する。

c) 教師との関係

「Q 28、先生とのコミュニケーション」、「Q

31、相談できる先生がいる」等の項目は、「はい」とする回答率が3年になるほど高くなっているが、先生とのコミュニケーションは、一年の後半に比べて2年次で減少している。

d) 友人との関係

「Q 29、学校での友人関係に満足」とする回答率は、高学年になるほど高くなっている。

2) バリマックス法による因子分析

バリマックス法による因子分析の結果、6因子が抽出された(表4)。

第1因子は、「夕の祈りは感謝を与える(Q 39)」、「朝の礼りは、力を与える(Q 38)」などの項目負荷量が高く『聖書的アプローチに対

表 4 被験者のデータを用いた因子分析結果
(バリマックス法による因子負荷量0.3以上の項目)

第 1 因子		第 2 因子	
Q39 夕の祈りは感謝を与える	0.782	Q23 人の思いが気になる	0.810
Q38 朝の祈りは力を与える	0.770	Q19 人が自分を好んでいるか気になる	0.722
Q40 朝礼により自己肯定	0.764	Q22 自分をよく思っていない人がいるのではと 気になる	0.712
Q34 聖書は感謝の念を増させる	0.760	Q9 他の人とうまくやっていけるか気になる	0.662
Q41 聖書はケアの指針	0.711	Q10 人の批評が気になる	0.566
Q42 人間関係は聖書が基盤	0.708	Q17 失敗が気になる	0.526
Q35 聖書は看護職に対する誇りを増させる	0.662	Q11 人の中に入っていくことへの不安	0.519
Q37 聖書は臨床場面で判断の指針	0.591	Q4 ミスは自分のせい	0.494
Q36 聖書は「天職への召命」とする	0.570	Q6 自己嫌悪がある	0.432
Q26 自己学習は適量	0.425	Q15 人の目が気になる	0.424
Q45 聖書によって人間関係が気になる	0.339	Q5 価値あるものは何かと疑う	0.385
Q29 学校での友人関係に満足	0.313	Q21 人を説得している時に人の思いが気になる	0.378
		Q29 学校での友人関係に満足	-0.336
		Q12 人の前ではにかむ	0.323
		Q2 自分は価値ある人間	-0.302
第 3 因子		第 4 因子	
Q32 看護職に誇り	0.787	Q18 初対面の人との話がむずかしい	0.737
Q25 実習が好き	0.764	Q16 人の話題に困る	0.706
Q24 看護職は自分をいかす	0.763	Q13 人前で話す時不安になる	0.701
Q33 勉強は楽しい	0.710	Q12 人の前ではにかむ	0.552
Q35 聖書は看護職に対する誇りを増させる	0.389	Q11 人の中へ入っていくことへの不安	0.477
Q10 人の批評が気になる	-0.027	Q1 劣等感	0.431
Q30 学校で相談できる友人5人以上いる	0.327		
Q15 人の目が気になる	-0.325		
Q31 学校で相談できる先生がいる	0.318		
第 5 因子		第 6 因子	
Q45 聖書によって人間関係が気になる	0.673	第28 先生とのコミュニケーションがある	0.773
Q46 聖書と自己像の不一致による葛藤	0.655	Q27 先生とのコミュニケーションに満足	0.713
Q43 聖書による不安	0.633	Q31 学校で相談できる先生がいる	0.465
Q44 聖書による葛藤	0.655	Q14 人前でのゲームを気にする	-0.377
Q42 人間関係は聖書が基盤	0.316		
Q11 人の中に入っていくことへの不安	-0.305		

(累積寄与率46.09%)

する肯定的反応』に関する因子と考えられる。

第2因子は、「人の思いが気になる (Q23)」、「人が自分を好んでいるか気になる (Q19)」などの項目で負荷量が高く、他人の目が気になる状況で『低い自尊感情』に関する因子と考えられる。

第3因子は、「看護職に誇りを感じる (Q

32)、「実習が好きである (Q25)」などの項目は負荷量が高く、『学習への適応』に関する因子と考えられる。

第4因子は、「初対面の人との話がむずかしい (Q18)」、「人の話題に困る (Q16)」などの項目で負荷量が高く、『役割遂行による緊張』に関する因子と考えられる。

表5 被験者の3年間の調査時間毎の各因子得点の平均値

		第1因子		第2因子		第3因子		第4因子		第5因子		第6因子	
		平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D
1年次	7月	0.138	0.858	0.542	0.754	-0.161	1.091	-0.192	1.045	-0.218	1.134	-0.239	0.886
(84年度)	3月	-0.364	0.897	0.312	1.043	0.187	0.849	-0.085	0.872	0.407	0.996	-0.129	0.960
2年次	7月	0.049	1.012	-0.063	1.044	-0.119	1.263	0.020	0.987	-0.043	1.046	-0.094	1.118
(85年度)	3月	0.122	0.924	-0.103	0.898	-0.201	0.970	0.128	0.980	0.052	0.964	-0.031	0.951
3年次	7月	0.074	1.015	-0.169	1.007	0.146	0.963	0.162	1.023	-0.022	0.883	0.135	0.929
(86年度)	3月	0.016	1.117	-0.277	0.926	0.068	0.735	-0.099	1.044	-0.209	0.894	0.239	1.014
6グループのF値		1.002		2.662*		0.802		0.522		1.529		0.900	
		聖書的アプローチに対する肯定的反応		件い自尊感情		学習への適応		役割遂行による緊張		聖書による葛藤		教師との人間関係	

第5因子は、「聖書によって人間関係が気になる(Q45)」「聖書と自己像の不一致による葛藤(Q46)」などの項目で負荷量が高く、『聖書による葛藤』に関する因子と考えられる。

第6因子は、「先生とのコミュニケーションがある(Q28)」「先生とのコミュニケーションに満足(Q27)」などの項目で負荷量が高く、『教師との人間関係』に関する因子と考えられる。これらの6つの因子の累積寄与率は、46.1%であった。

3) 因子得点を用いた調査時期別の分散分析

被験者の各調査時期別の各因子の差を調べるために、各対象の因子得点を求め分散分析を行った(表5)。また全調査対象(表1-2)すなわち入学年度別各学年、また同学年による7月と3月の各因子(10因子)の差を調べるために、同様に分散分析を行った(図2)。図2は、被験者の学習環境の受容に関する3年間の推移の比較検討のために被験者が在学中の看護学生を全調査対象として分散分析を行ったものである。

a) 聖書的アプローチに対する反応

第1因子『聖書的アプローチに対する肯定的反応』に関して被験者(37期生の場合)、時期別による有意差は認められなかったが、1年の後半に肯定的反応が低下する傾向がみられた。これは、第5因子『聖書による葛藤』の因子得点が高くなる時期と一致している。

b) 自尊感情

被験者において、第2因子『他人の目が気きなる』に関して、3年間の推移に有意差が認められ、高学年になるほど他人の目が気にならない傾向が示された(表5)。これは、表3の結果とも一致している。第4因子『対人関係のむずかしさ』においては、有意差は認められなかったが、高学年になるほど得点が高くなり、3年の後半に低下する傾向がみられた(表5)。

第8因子『自信』に関して、3学年の推移に有意差(5%水準)が認められた(図2)。

被験者の特性として他の年次に比べ1年次7月から3年次7月まで自信のない傾向が高い(図2)。

c) 学習への適応

第3因子『学習への適応』に関して、入学年度別3学年の推移に有意差(1%水準)が認められた。各年次とも2年次7月、さらに2年次3月に適応が低くなる傾向がみられた。被験者3年間のクロス集計の結果では(表3)、「自己学習量は、適量(Q26)」に対して「いいえ」とする回答率が、一年後半から2年にかけて高くなっており、時期的に符合している。

d) 教師との人間関係

入学年次別学年間の因子得点の比較において、第7因子『教師との人間関係』で3学年の推移に有意差(1%水準)が認められた(図2)。教師とのコミュニケーションは、各入学

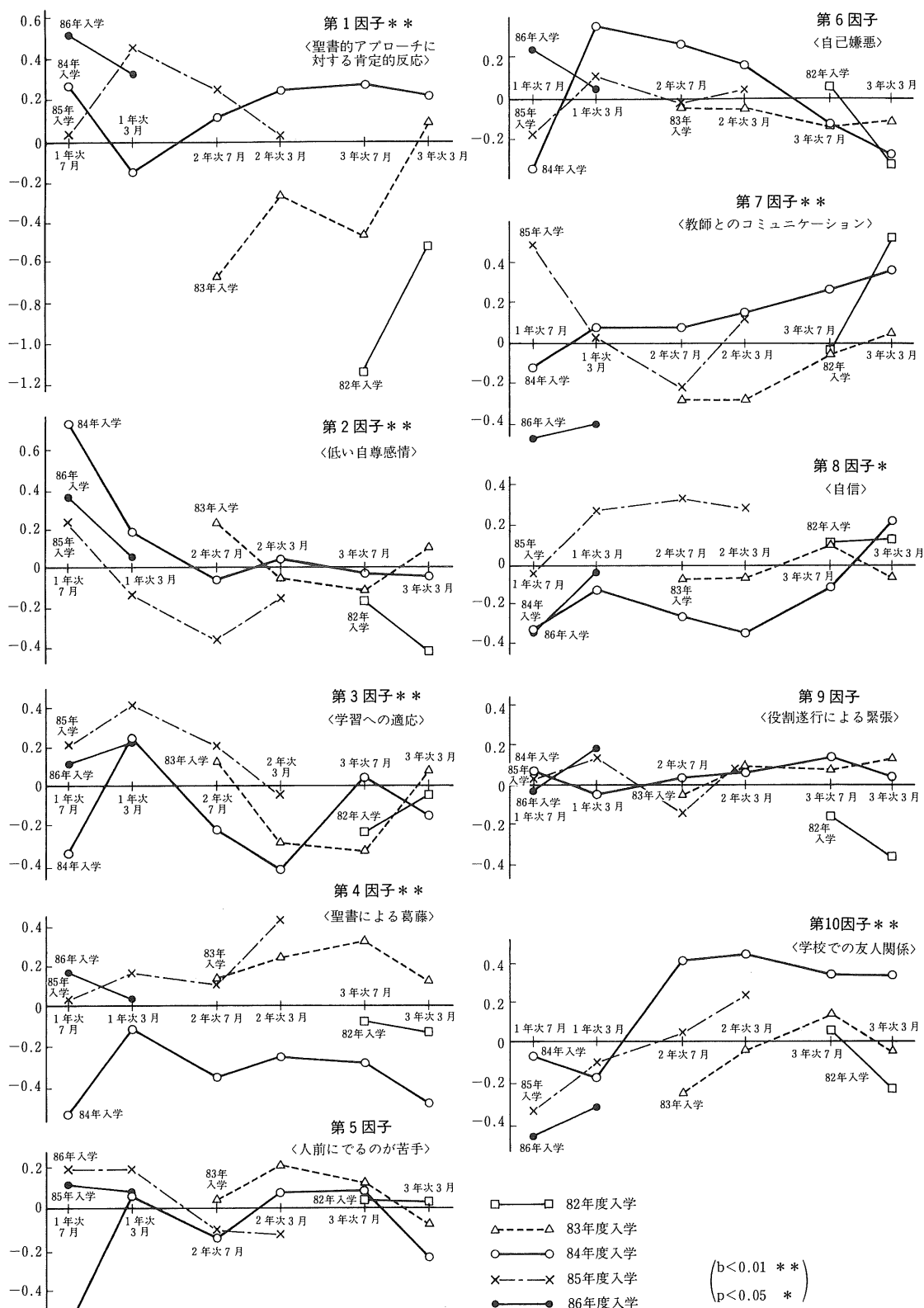


図2 入学年度別、調査時期別の各因子得点の平均値の推移

年次とも2年次7月から3年次3月にかけて良好となる傾向がみられる。

e) 学校での友人関係

図2に示したように、第10因子『学校での友人関係』に関して3学年の推移に1%水準で有意差が認められた。82年次、83年次入学の3年次3月を除くと、他の入学年次は、高学年になるほど学校での人間関係が、よくなる傾向がみられる。

5. 考 察

被験者の3年間の追跡調査結果は、必ずしも他の入学年度の学年と同一の傾向を示した訳ではない²⁶⁾²⁷⁾。しかし入学年度別比較で示したように各グループの平均値の数値は異なるが、第1因子以外は同様な推移パターンを示していることは、極めて興味深い(図2)。看護学生のSEを中心にそれに影響を及ぼす因子について以下に考察した。

1) 看護学生の学習環境の受容と自尊感情

菅ら²⁸⁾によると、教育目的や特性が、SEの高低との関連を女子短大群、高等看護学校群では、(医科大群を除く共学の女子群よりも)いずれもSEが高いことが報告されている。本研究によると被験者の3年間の推移に有意差が認められ、高学年にはるほど他人の目が気にならない傾向が示された。

第8因子「自信」に関する被験者の結果は他学年よりも低いことから、入学当初よりSEの低い学年と考えられる。3年後半になり、自信が向上し他人の目が気にならなくなっていることから3年前半まで、不適応状況と考えられる。3年前半からの第1因子、第8因子の上昇傾向は、教員の学生に対するサポートの強化時期と一致している。したがって、看護学生の適応という点から、教員のサポートは重要な因子と考える。

また本学では、寮生活への適応という問題もあり、その点も含めて学生間で互いの人格がありがたみに受け入れられていく過程を反

映していることもあるものと思われる。

2) SEに影響を及ぼす学習環境における因子

A. 実習とSEの関係

看護への適応に関しては、2年次に低下する傾向が全般に認められ、かつ他人の目を高学年になるほど気にならないとする傾向があることは、既に報告した結果と符合している²⁹⁾³⁰⁾。

学習への適応が、2年次に低下する原因として、実習時間の増加と共に、自己学習量も増加し、加えて看護実践の困難性も増加しているためと考えられる。しかしクロス集計における「Q4、ミスは、自分のせい」、「Q6、自己嫌悪」、「Q9、他の人とうまくやっていけるか気になる」、「Q12、人の前ではにかむ」の4項目は、1年次で「はい」とする回答率が高く、SEとの関連で劣等感の強いことが考えられる。

2年の後半から3年にかけての効果的な実習内容のアプローチについては、研究課題と考え教員の研究会を重ねてきた。2年次における教師の看護過程へのアプローチを工夫することでかなりの成果があげられると思われる。特に看護過程の展開で学生にとって最も困難な点は、アセスメントの過程であろう。そこで看護上の問題の明確化ができるよう指導の強化を試みた結果、実習における学生のコンフリクト(学生の実習目標に対して自己の期待と行動の不一致)は、軽減し実習効果を高めることができた³¹⁾³²⁾。

B. 健康な自己愛としてのSEと聖書的アプローチ

傷つきやすくSEの脅かされやすい青年期にある看護学生が、看護職に入るためのカリキュラムによって学習課題をこなしていくのは容易なことではないと思われる。学生自身が健康な自己愛すなわち自己肯定につながる自己の成長に目を向けるような動機づけとし

ての聖書的アプローチの意味について考察する。看護学生に対する聖書的アプローチは、看護婦として「相手の体験的世界を共有する」態度への動機づけに影響しているものと思われる。つまり、自分に対してある程度の自信や満足感、ありのままの自分を無条件に愛する態度が形成されていると思われる。「自分は、価値のない何をしてでも成功せず、決してミスをする人間である」という囚われからの解放がなされるよう期待している。学生自身にこだわりがあると他者への関心は、妨げられやすいため、看護学生における健康な自己愛は重要なアプローチと考えている。

この聖書的アプローチに対する学生の反応は、1年の後半に低下し、逆に聖書的アプローチに対する葛藤が増加している(図2)。これは、1年の後半から2年にかけて聖書的価値を知ることや環境への適応に懸念な状態であるが、その時期を過ぎると学生自身がどう働きかけ行動するかという内省化への過程に入るためではないかと思われる。

C. 看護学生の SE と教師およびその他の人間関係

看護学生の「学習への適応」を促がすためには、前述のように教師との人間関係が重要な因子であろう。本研究では、1年から2年にかけて他人の目が気になり、自信がなくなるなど自尊感情が低下している傾向が示された。この理由として実習内容が複雑になり、自分自身を意識させられる看護場面が多様化していくためと考えられる。

SE は、他人によって反映されたその人の評価から生み出されているということができよう。学生にとって臨床実習では、特に叱られる体験が多いため、SE の低下へと至りやすい。図2によると、教師のコミュニケーションは学年が進むにつれて、すなわち実習時間数が増加する度合に応じて、教師とのコミュニケーションが高くなっている。これは、学生の学習を促進するための重要な因子と考える。同時に学校での友人関係も高くなってお

り、寮生活における友人間のサポートが確立していると思われる。

6. ま と め

本学看護学生の3年間の学生の自尊感情と学習環境の受容に関する因子を検討し次のような結果が明らかになった。

1) SE と聖書的アプローチについて

聖書的アプローチは、学生のアイデンティティの確立を促し、さらに看護の認識を深めるために重要な因子と考える。自己と人生を肯定し学生自身成長を深めていくプロセスで聖書的価値が影響していると考えられる。

各学年の3年間の学年別時期別自尊感情項目得点の平均値と標準偏差を求めることによってさらに明確に SE に対する学習環境の影響を検討できたと思われる。

2) 学習への適応

2年次の学習への適応は、他の学年に比べ低下する傾向が見られた。実習への適応を促がすための教員の研究会の成果が確認できたが今後さらにカリキュラムも含め、検討する必要のあることが示唆された。特に実習記録提出に関する学生の緊張緩和は、課題である。

3) SE と教師およびその他の人間関係

学年が進むにつれて教師および友人とのコミュニケーションがよくなる傾向にあり、適応促進因子となっていると考えられる。

付記 第8回日本看護科学学会にて発表したものにさらに考察を加えたものである。

引用文献

- 1) Rogers, Carl R.: (村山正治編訳), ロージャズ全集 12, 人間論, 初版, 26, 96, 岩崎学術出版社, 東京, 1968
- 2) 花沢和枝: 学生生活の実態, 聖路加看護大学紀要, No.3, 1-15, 1975

- 3) 木場富喜：看護学生の意識の変化に関する研究・1，第9回看護学会教育分科会集録集，44-49，1978
- 4) 伊藤曉子他：看護学生の生活と看護教育に対する考え方，看護実践の科学，10：3，18-42，1985
- 5) 坂口けさみ他：看護短期大学生の生活の実態調査，東京女子医科大学看護短期大学紀要，No.3，33-43，1981
- 6) 松木光子，丸橋佐和子：看護学生の臨床実習における精神安定と看護観の変容について，大阪医療技術短期大学研究紀要自然科学・医療科学篇，No.5，85-101，1977
- 7) 波多野梗子他：看護学習および看護職に対する態度の発達の变化，看護教育，23：8，513-520，1982
- 8) 坂口けさみ他：看護短期大学生の生活の実態調査，東京女子医科大学看護短期大学紀要，No.3，33-43，1981
- 9) 松木光子：看護学生の精神衛生管理について，看護教育，18：11，689-692，1977
- 10) 島内節他：看護教育課程別にみた学生生活に対する意識と態度，看護研究，7：4，409-420，1974
- 11) Coopersmith, S. : The Antecedents of Self-Esteem, Freeman publishing Company, San-francisco, 1967
- 12) 和田サヨ子，高木廣文：聖書的アプローチの自尊感情に及ぼす影響，カトリック教育研究，No.3，64-75，1986
- 13) 和田サヨ子：本学の教育理念に基づく臨床実習指導の考察 聖母女子短期大学紀要，2，48-54，1988
- 14) Rogers, C. R. : 伊東博訳，ロージャズ全集8，パースナリティ理論，pp 7-24 岩崎学術出版，1967
- 15) 前掲書 14) p. 97
- 16) 前掲書 12)
- 17) 筒井真優美，和田サヨ子他：看護学生の自尊感情と学習環境および今後の課題について（その1）聖母女子短期大学紀要，創刊号
- 18) 和田サヨ子，筒井真優美他：看護学生の自尊感情と学習環境に関する研究，（その2）聖母女子短期大学紀要，2，27-36，1988
- 19) 筒井真優美他：看護学生の自尊感情と学習環境に関する調査，全国看護教育研究会誌，19，3-15，1985
- 20) 中西信男他編：心理学10，自己：自己，197-210，有斐閣双書，1981
- 21) 前掲書 7)
- 22) 前掲書 4)
- 23) 前掲書 5)
- 24) 柳井晴夫，高根芳雄：現代人の統計 多変量解析法，118-120，125-128
- 25) 柳井晴夫，高木廣文編：多変量解析ハンドブック，

- 現代数学社，1986
- 26) 前掲書 17)
 - 27) 前掲書 18)
 - 28) 菅 佐和子：大学生の Self-Esteem についての実証的研究 (I)，愛知医大誌8，77-82，1980
 - 29) 前掲書 17)
 - 30) 前掲書 18)
 - 31) 佐藤栄子：臨床実習における看護学生のコンフリクトについて (I)，聖母女子短期大学紀要，創刊号，35-46，1987
 - 32) 佐藤栄子：臨床実習における看護学生のコンフリクトについて (II)，2学年の比較，聖母女子短期大学紀要，第2号，37-47，1988

参考文献

1. 遠藤辰雄編：アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版，1988
2. 小島禮子：看護学生の職業意識の形成に関する研究，看護研究，8：1，46-81，1975
3. 山本よしゑ：看護学生の看護職へのアイデンティティの形成過程，第16回日本看護学会集録，看護教育，140-142，1982
4. 玉木ミヨ子他：臨床場面における態度育成の教育方法，看護展望，11：6，73-76，1986
5. 森田チエコ，島内節：看護学生の臨床実習に対する認識の変容過程と学生・指導者間の認識の関係，看護教育，18：9，539-547，1977
6. 遠藤辰雄他：Self-Esteem の研究，九州大学教育学部心理学部門紀要，18，2，53-65，1974
7. Rogers, C. R, 村山正治編訳：ロージャズ全集12，人間論，初版，岩崎学術出版社，1968